育兒の經驗

光藤泰次郎

大自然に接せしめると、都會に生れた子供、殊に東京のやうな大きい都會に生れた子供は、動物なり、植物なり、山なり河なり海なり、此の天地の大自然に接する機會が少い、隨つて自然に對する趣味が乏しく、自然に關する智識が缺乏するやうに思はれる。しかし子供の天性は決してさういふものではない。彼等は皆小植物學者である。小動物學者である。小鑛物學者である。苟も機會だにあれば、植物を研究しやうとするのである。動物を學ばうとするのである。鑛物を研究しやうとするのである。自分等が田舍で育つた時のをを考へて見ると、實に天地大自然の懷に抱かれて、育つたものである之に較べて見ると、東京の大都會に生れた子供は實に可哀さうなものである。彼等は此の天地大自然の懷を知らないものである。而してそれは殊に中流以上の子供に一層多いやうに思はれる。それ故に子供を敎育して行くには、どうしても此の天地の大自然に接して、子供の本能を滿足せしめ、後來の自然に關する知識の基礎を造らせねばならぬ。

花を愛することは極めて幼い時から、赤き、白き、黃に紫に、四季折々の花を折り取つて、之を持たせ、さうして目を喜ばせ併せて精神を慰めるやうに仕向ける。一人あるきが出來るやうになれば、自ら草花を摘ませ、之を持つて喜ぶといふ風に仕向ける、櫻の花は爛漫と咲き盛り、梅の花の馥郁とかほるのをば、あゝ奇麗だ、あゝ美しいなどゝ共に之を慰め、共に之を樂しむといふ風に仕風けると、子供は忽ち花好になつて仕舞ふ。さうすれば啻に植物に接するといふ利益があるばかりでない、美しい感情を養ふ助となるのである。

2、花の名を敎ふると　子供は子供相應に疑問を持つものである。疑問を持てば、父なり母なり、兄姉なりをつかまへて、之を解決しようと試みるのである。かういふ機會を利用して、普通植物の名位は敎へ得られるのである。最初注意して緒を

開いておいてやれば、子供は發動的に名を知らうと勉めるのである。決して子供の腦頭に無理をさせずして、自然に且容易にさせ得るのである。庭に下りて遊んで居る際などには、名もなき小い花などを取つて來てこれは、何ですかなどゝ尋ねて父母を困らす位になります。それから少し進んでは花の色を尋ねて見たり、或は花瓣などいふ花の部分の名を敎へたり、或は櫻の花の花瓣は幾つあるか、梅の花の花瓣は幾つか、櫻の花瓣と梅の花瓣とはどこがちがふかなど疑問を發して、調べさせたりすると、子供はなか〳〵鋭敏で、能く事物を觀察するといふ習慣をつけ得られます。

3、植木の生話をさせるを　なほ進んでは、朝顏なり、余線花なり、鳳仙花なりの種子をまかせて、其の發芽の狀態を觀察させたり、毎日水をかけさせては、日々に發育するを樂しませ、種々世話した結果、奇麗な莟を持ち、立派な花が咲くのを喜ばせる、かうなると植物に對する興味は一層深くなるやうに感ぜられます。これは一寸の注意で出來るをであるから、緣日で花を買つて來るよりも、種子を蒔くをからやらせたく思ひます。子供は妙に之は私の蒔いた朝顏だ、こんなに大きくなつた、こんなに奇麗に咲いたなどと、其の喜びは大したものであります。

4、郊外の散歩にともなふを　市街の空氣はあまり清潔でないので、折々は郊外に、散歩を試みしめ、遠足に同伴したりするをが、身體の健康を增進する上からいつても大へんよいのは、今さらこゝに言ふまでもないが、天地の大自然に接するといふ上からも非常に益があるやうに思ひます。公園の逍遙も無論よいには相違ないが、しかし公園内の花木は、一切折り取るをを禁じてありますから、小植物學者の研究には、あまり適當してゐるとはいへません。それよりか玉川緣とか、田端とか、大久保とか、廣々とした郊外の地の、しかも草花の採集自由勝手であるといふ地が宜しい。若しかういふ地につれて行かうものなら、今ならば、菫とかたんぽゝとか、蓮花草とか、之を採集するに熱中して、なか〳〵歸らうとはいひません。全く大自然の懷に抱かれて、天地と一體になつたの

かと思はれます。郊外の散歩が如何に子供の頭腦を刺激するかは、日曜の來るたびに、玉川へ行きたいとか、田端へ遊びに行きたいとか、切望するので分ります。子供等は、曾遊の樂しさが新しい望を起すほどに深く且切なるものがあるのです。

5、昆虫類を捕ふるを、犬を恐れて嫌ふとか、猫をこはがつて泣くとか、其の他馬や牛を見てひどく恐るるのも、或は子供の天性であるかも知れぬ、彼等は自識しなくても、生を求め死を避ける自然の本能からして、生命の不安を感ずるのであらう、此のやうなる子供であつても蟬とかトンボとか、蝶々とか、美しい可愛い昆虫を好まぬ子供はなからう、彼等が動物に關する智識は最初この昆虫から得るのではないかと思はれる程である。炎帝漸く威を逞うし、東京の芋屋が悉く氷屋と變化し終つた頃は、地の中に居つた幼虫が蝶に變じ、水の中に居つた幼虫がトンボになる時なので、トンボ釣り今日は何處まで行つたやら、の句は必ずしも田舍の子供にのみ當てはまる譯ではなく、隨分東京の子供にも此のやうに考へ得らるれるのである

扨子供がトンボを捕へて、之を絲につなぐはまだしも、其の腹部を切つて、どこそこへ味噌を買ひに行けなどゝいつて放すのを見ると、如何にも動物虐待であつて、かやうなをは一切禁絶したいやうにも思はれるが、しかし私は判斷がつきかねる。とんぼと蟬とに就いて動物虐待を一切禁絶する利益と、よしや多少の虐待をしようとも、子供が自然に接して得る利益と何れが大きいであらうかと、いや私はどうも蟬が美しい聲を出して、子供を誘ひ、トンボが奇麗な姿をして子供の目を引きつけるのは、彼のトンボとか蟬とかが、自然と子供との間を結びつける爲の使命を帶びて來て居るのではないかと私には思はれます。それ故に最初は蟬をとりトンボを捕るをを一切禁絶しやうかとも考へたをもありましたが、しかし動物虐待とか何とかを眞向に振りかざして、子供が天然に親しむといふ本能を抑壓し、却て後來の發展を妨げるやうなをがあつてはならぬと考へついて、暫く動物虐待說を撤回して、子供の自然にまかせるをとしました。諺に子供は風の子と申しますが、これは

寒き風にも恐れぬといふことを言ひ表はしましたものでしようしかし。或る意味からいふと子供は自然の子である。本能の發動するまゝに、熱くて熱くてたまらないといふ日にも、ちつともひめず恐れずトンボを捕へ、蟬を捕へるに熱心し、捕へてからは翅をきつてとばす、いぢつて鳴かす、色々にして遊んで居る。かくして能く自然に接し、自然と親しみ、自然を了解するのである。それだからかういふ場合に、どれが雄虫であるか、雌虫であるか、翅は幾つあるか、足は幾本あるか、身體は幾つの部分から成り立つて居るか、頭をなやまさずして知らしめるをが出來る。自分の經驗によるに、かういふ風に自然に接し、實物を取扱つて得たる智識は實に確實であつて決して忘却するものでない。我々の受けた不完全な小學校の理科教授や、尋常師範時代の完備しない博物教授よりはよほど價値があつたやうに思はれる。それ故子供が蟬をいぢくり、トンボをいぢくつてゐる際に、一寸疑問を發してやれば、子供は精密に觀察して、確實な智識を得ると同時に、今度は色々の疑問をこしらへて、あまり博物に堪能でない、父母をこまらせる程に進みます。其の他いろいろの蝶をとらへ、いろ〳〵の昆虫を捕へるも同樣である。

6、昆虫を飼育すること、田舍につれて行つて、きりぎりすを捕へるとか、松虫を捕へるとか、鈴虫を捕へるとかずるのは、子供に取つて無常の樂しみである。捕へ得たる昆虫を放しがひにして毎夜鳴く音を樂しむのは一段と面白いですが、更に籠に入れて飼育するは、層一層樂しいのみならず、餘程利益になるのです。即ち子供は之によつて、昆虫が生活狀態を知り、飼育法を知る譯であるから、餘程價値がある譯であります、東京にあつては、松虫鈴虫蠻虫などを捕へるをは出來ないが、虫賣が賣りに來るから、それを買つてやつて、籠養させ、自ら茄子などを切つて飼育する世話をさせるがよいと思ひます。子供は自分の好きな事にはちつとも勞を厭ひません、喜んで其の骨折に任じますから、是非都會の子供にもかういふ經驗を得させるがよからうと思ひます。昆虫の自由を束縛するから、可哀さうであるといふ動物虐待論は、

しばらく引こめておいたがよからうと思ひます。

7、魚類を捕ふること、田舍の子供は、小い時分から、水に親んで、笊などを以て、目高をすくひ、鮴をすくひ、鮒、鯰などをすくひ、だん〳〵進んでは、川に釣を垂れて、魚を釣るなど、自由に出來るけれども、都會の子供はどうしてもかういふ事に緣が遠い、緣日で金魚や鯉を買つて、之を飼ひおく位のものである。尤も隨分河へ釣に行くものもあるが。しかし都會の子供の幾部分に過ぎない。それ故にふだん能く注意して、魚屋の店頭にあるやうに、魚は死んで居るものでもなければ、切身になつて居るものでもない、或る魚は海に或る魚は河に、活潑に游泳して生息して居る者であるを知らせねばならぬ。此の點に於ては、都會は餘程不便であつて、まだ思ふやうに、參りません。

8、鳥類を捕ふると、子供に取つては、花を折るより、蝶や蟬を捕ふる方が面白い、蝶や蟬を捕ふるよりも、潑溂たる鮮魚を捕へるとは更に面白い。魚類を捕ふるよりも、空を飛ぶ鳥を捕へるとは更に更に面白い。いつでも獲物が大きければ大きい程興味も亦多い譯である。此の面白い鳥を捕へるとも、東京に於ては殆ど出來ない。田舍の子供は雀の巢をさがして、其の巢を破り、其の卵をこはしたり、或はチニウチニウとなく子供をつかまへたりしてる間に、雀の巢のかけ方や、いつ頃卵を產むかといふをや、子雀の嘴の樣子や、何かを知るをが出來る。それから頬白や告天子やに就ても其の通りである。然るに此の點に於ては、都會の地は全然だめである。どうもかういふ機會が少いのである。僅に明白なりカナリヤなりを飼養するに止まるのであらう。しかしこれはまだ實行させません。

9、動物園や水族館を參觀させると、都會の地は天然物に接せしむる機會は甚だ少いが、しかしてに便利なものがある。外でもない、動物園や水族館である。度々こゝへ子供をつれて行つて、象や獅子の如きものより、鳥類、魚類、貝類等に至るまで、實物を參觀せしむるとは、子供に實地觀察の大利益を得しむる譯である。此の一點は都會

が田舎にまさつた唯一の長所であらうか。

10、機會があつたら田舎につれて行くと、旅行なり、温泉なり海水浴なり苟も田舎に行べき機會があり、子供をつれて行つて差支ない場合ならば必ず子供をつれて行つて、或は廣々とした平野の中に立たしめたり、或は洪濤わき立つ大海のほとりに遊ばせたり、或は雲に聳ゆる千仞の山につれて上つたり、或は混々と湧き出づる温泉に浴せしめたりして、各方面から自然に接せしめるがよい。幾ら話を巧みにしても實際海を見ない人には、海を了解させるとは出來ない。汽船にのつて一度海をわたるか、或はドウドウと波音たかき濱邊に下り立ちて或は波をくゝり或は貝を拾ひ或は釣を垂れれば、どんな子供でもすぐによくわかつて仕舞ふ。山にしても其の通り、河にしても其の通りであつて、彼の百聞一見に如かずといふをは、子供の智識の程度には更に一層適實であると感ぜられます。

（まだある）

▲カルヽス温泉の商人　墺地利のカルヽスバッドは有名なる温泉場にして同地の人口は一万六千に過ぎざれども浴客は常に旅館に充滿して各地より商人の入込む者夥しく其商人は墺地利は勿論獨逸、佛蘭西、白耳義等各國の人種を含み此等の商人八百餘人は絶えず各旅館に出入して其賣方の巧みなるを驚く可く大抵の浴客は不用なる物品を強て購求せしめられて歸途に之を持餘さゝるなしと云ふ

▲獨帝の寄贈書　獨逸皇帝は此程米國大統領ルーズベルトに一大圖書を贈りたるが其圖書は縱二、八〇米突（凡そ九尺三寸）横一米突半（凡五尺）厚さ九〇瑚米（凡そ三尺）を有し獨逸の百科全書と稱すべき性質のものにして獨逸の風景を寫したる巨多の繪畫を挿入し表裝は美麗を極めたり其重きは之を運搬するに馬車を要する程にして書中には獨逸皇帝の自筆にて『獨逸皇帝ウイルヘルム及び獨逸國民は此書を米國大統領ルーヴエルト及び米國民に贈る』とあるも何等の書名をも附しあらざる由なり

▲新金鑛に蝟集する人　今より二三個月前米國の桑港より凡そ三百哩を隔つるネヴアダ高地に赴きたる人々は同地方に於て砂金を發見して許多の利益を得たる由にて此事桑港に傳へらるゝや勞働者等群を爲して同地に赴く者多く從來人家絶無の地は僅々一個月の間に人口一万を算するに至り日々同地に入來る者二百人を下らず前日の價格一万五千圓の土地は翌日六万圓にて賣行く狀況なりと云ふ